

佐多稲子『子供の眼』論—戦後核家族にみる束縛と希望

小林 美恵子

On Kodomo-No-Me by Ineko SATA : Restraint and Hope of a nuclear family after the World War II

Mieko Kobayashi

Key Words: Nuclear family, After the World War II,
Restraint, Housewife, Heiress

はじめに

佐多稲子『子供の眼』†1は、『家庭朝日』に昭和29(1954)年3月17日から6月30日まで連載された。妻を亡くし、幼い修を連れて俊二と、30歳を過ぎた歯科医院の跡取り娘・幸子との結婚を描き、そこに一家の家事を手伝う俊二の妹・喜世子の縁談も織り込んだこの小説は、戦後の新民法下で人々が新しい家庭づくりを模索していたさなか、タイムリーな作品であったと言えよう。

矢澤美佐紀はこの作品の問題点として、幸子が「当時まだ珍しかったであろう歯科医という知的職業を夫の意向に合わせて捨ててしま」った点を挙げ、それは「佐多の理論からすると後退」であると指摘する[1]。また、松竹での映画化にあたり脚本を担当した松山善三は「書きながら、改めて共稼ぎという、一つの夫婦のあり方を考えてみた。原作は、この問題に全く何の解決をも与えてはいない」†2とのコメントを寄せた。たしかに佐多自身も幸子に職業と愛情のバランスをとるための「行動」をさせなかったことについて「この作品ではそれを逃がしている」[2]と述べている。しかし、作品自体に修正を施そうとする意図は感じられない。幸子に仕事を手放させても、それを上回る何かを描いたということだろう。

幸子が仕事を辞め、俊二についていくと決めたことによって、修も俊二も喜世子も大団円を迎える。では『子供の

*教養科 Division of Liberal Arts

†1 原題は『子供の目』。週刊誌連載の16回ぶんが、そのまま全16章を構成している。

†2 『キネマ旬報』第134号12月下旬号(昭和30(1955)年12月)に掲載された「シナリオ 子供の眼」より。p.123。なお、映画の公開は昭和31(1956)年1月15日、幸子は高峰三枝子、俊二は茶川比呂志、喜世子は高峰秀子。同年、第13回のゴールデングローブ賞を受賞している。

眼』は、幸子が専業主婦になるまでの成長譚なのだろうか。

佐多は戦後、家族が新しい姿に変わりゆく時代†3を意識して、この作品を描いたと思われる。幸子たち一家も、その一サンプルとして示されたものに違いない。本稿では、俊二と幸子がどのような理想を持ち、どのような障害に阻まれているのかを見極めたうえで、問題点として注目されているラストシーンの意味を考えてみたい。

1 幸子の〈二つの庭〉

『子供の眼』の作品内時間はほぼ発表時に重なると思われる。上空を飛ぶB29の姿が描きこまれているところを見ると、朝鮮戦争が休戦に入る昭和28(1953)年7月以前とさらに絞り込むことができよう。

修は現在小学校三年生、実母は彼が5歳頃に発病し、2年ほどの入院生活の後、1年余りに亡くなっている。修は終戦間際の誕生とみられ、実母は戦後の栄養不足や不十分な治療の影響亡くなったとも思われる。その後は父の俊二、その妹である叔母・喜世子と三人で暮らしていた。この間に俊二と幸子に縁談がもたらされ、一家が住む都営住宅に幸子が嫁いできた。それから2か月ほどが経過しているが、フルタイムで働き、帰日も遅い幸子は、婚家よりも

†3 戦後の家族形態の変化については野々山久也『現代家族のパラダイム革新 直徑性家族・夫婦聖家族から合意性家族へ』(東京大学出版会、平成19(2007)年4月)等を参照した。旧民法下の家制度に伴う直系性家族、すなわち長男が戸主権や家督相続権を持って一族を保護・統率していた形から、昭和30~40年代(1955~74)の都市部を中心に、夫婦と子どもからなる核家族が一つの家族として意識されるようになり、個々の家族システムが夫婦単位を中心にして構造化されるという夫婦制家族が個別的に実践されていったという経緯が示されている。pp.75-111。

実家で過ごす時間が長い。

幸子の父の元井安之助は、高田馬場の近くで小さな歯科医を開業していた。幸子自身も歯科医専を出て、父の家で手伝っている。安之助は終戦時に朝鮮から引き揚げて来ての、なじみの薄い土地での開業であったが、それだけに娘の幸子を頼りにもしていた。それに幸子はひとり娘だったのである。以前ならば跡取り娘というわけで、家業も継がせ、外へ出してやる娘ではなかったが、幸子の三十を過ぎた婚期のこともあり、俊二との今度の縁談に幸子自身のすすんでいたのが、親たちのあきらめともなつて一応、幸子は俊二のもとへ嫁いだ形だった。が、安之助夫妻にとっては、幸子の嫁いだ後のこの二か月の間にも、まだあきらめきれぬ感情のしこりが何かの時に出て、幸子自身、しばしばその間に立って割り切れぬ思いをしていた。(第 2 章)

この部分には、多くの情報が含まれている。まず、幸子はすでに 30 歳を過ぎていて、歯科医専卒業生、すでに歯科医として親の開業する歯科医院に勤務する自立した職業婦人である。作品内の現在が昭和 28～29 年頃とすれば、大正末期生まれの幸子の歯科医専在学期は戦争が敗色濃厚となった昭和 18(1943)年以降ではないだろうか。

多彩な職業人の言葉を集めた鎌田慧『日本人の仕事』に、昭和 7(1932)年生まれの男性歯科医師が取り上げられている^{†4}。戦後に大学進学したと思われる彼によれば、当時でも歯科大学は全国に 6 つのみ、歯科医師はインターンは不要だが、一人前になるには 2, 3 年の修練が必要であった。戦時中に歯科医も大量に喪われたので、戦後は無資格の歯科医も駆り出されるほどの人手不足であったという。困難な状況の中で、元井夫妻は将来の夢を幸子に託し、歯科医になる学問を収めさせたに違いない。「なじみの薄い土地での開業」にあたり、若い女性歯科医である幸子の存在は元井歯科医院の看板ともなつていよう。「以前ならば」跡取り娘として婿を取り歯科医院も幸子が継ぐ、という至極当然に描けたはずの青写真が破れたのは、戦後の結婚難のせいである。出征した青壮年男性が集中して戦争の犠牲となったことで、彼らの妻となるべき国内の女性たちもまた大量に伴侶を持てぬまま婚期を過ぎ過ぎていった。このことは大きな戦争被害の痕跡であり、当時の社会問題の一つでもあった。

^{†4} 昭和 7(1932)年福岡県生まれの歯科医・井上藤夫へのインタビュー「地域の信頼をつくる一歯科医」(『日本人の仕事』(昭和 61(1986)年 9 月、平凡社)より。pp738-743。

その一方で、女性たちの中には「主婦にあらざれば女にあらざ」という風潮が規範力を持つようになっていく。俊二たちの住まいも都営住宅だが、経済成長に伴って地方から流入してきた高学歴のホワイトカラー層が大都市郊外の集合住宅に住みつき、夫婦と未婚の子どもの「夫婦制家族」を形成、家事・育児に専心する主婦増が女性たちの理想とされていった^{†5}。ちなみに、この層の夫は農家の次男以下である場合が多かったという。俊二も名前からして長男ではあるまい。

幸子の両親である安之助・とき江夫妻には、娘に独身を通させるという選択もあったろうが、幸子を不憫に思う気持ちは、前述した主婦をよとする風潮の中でいやが上にも高まったであろうし、孫への期待などもあって、俊二との結婚に踏み切らざるを得なかったのだろう。縁談の際、幸子の両親から俊二に対し、同居の希望は示されたと思われるが、実現しなかったのは、俊二の意向だろう。幸子はこの縁談に「すすんでいた」というから、俊二の意向を察した幸子が両親を止めたとも思われる。俊二には、幼い修や未婚の喜世子の存在を考えての遠慮、あるいは自分たち若夫婦だけの暮らしを楽しみたい思い、さらには一人娘で親との結びつきの濃い幸子を、親から切り離して独占したい気持ちもあったかもしれない。いずれにせよ、両家の思惑がもつれ、幸子は婚家と実家のどちらに軸足を置いているのか不明瞭な状態のまま、新婚 2 か月を過ごしていた。

2 喜世子と兄一家

喜世子は俊二の妹で、現在 26 歳。甥である修の母親代わりも含めた主婦としての暮らしは、義姉である修の実母が発病した 4 年ほど前から始まっており、喜世子が現在まで未婚でいるのは戦後の男性不足のゆえばかりではない。

喜世子は現在も兄一家の家事一切を負わされ、結婚の機会を逃しているだけでなく、忙しい毎日でろくに若者らしい楽しみも持つことができない。「喜世子は兄の再婚で、彼女の生活事情も変わるかと期待していたのに、それがあまり変わらない、というので不満だった」とあるように、職業を持つ新妻・幸子は主婦としてほとんど機能せず、家の中はいっそう喜世子なしにはまわらないようになってしまった。喜世子は幼い修に「犠牲」という言葉まで用い

^{†5} 当時の主婦像や家族像については落合恵美子『21 世紀家族へ 家族の戦後体制の見かた・超えかた』第 3 版(ゆうひかく選書、平成 24(2012)年 3 月)pp32-48 や阿部恒久・佐藤能丸『通史と史料 日本近現代女性史』(芙蓉書房出版、平成 12(2000)年 12 月)pp186-171 を参照した。

て不満をこぼさずにはいられない。

「だって僕、ひとりでご飯のことでできないもん。」／
「そうよ、お母ちゃんがいなくてね、だけど今度は、お母ちゃんが来たんだから、本当は、お母ちゃんがしてくれるのがほんとうよ。ね、だけど、あんたの新しいお母ちゃんはそれをしてくれないんだもの。何のことはないわ、お姉ちゃんは、あんたやあんたのお父ちゃんのために、犠牲になっているみたいなものよ。」
(中略)「お父ちゃんももっとよく考えて結婚すればいいのにね。自分の好きだってことだけじゃ解決しないわよ。いろんな問題があるんだもの。みんな、私のこと犠牲にしているんだもの。お姉ちゃんだって、自分の生活のことがあるわよ。死んだお母ちゃんの病気の時から、ずっとなんだもの。」(第1章)

現在の彼女の不満は、直接的には主婦の役目を果たしきれない幸子に向けられるが、根本的には、仕事を持ち、実家の面倒もみななければならない女性を妻にした兄の無計画さに向けられる。

ここで特徴的なのは、喜世子に幸子の立場の特殊性があまり重く認識されていないことだ。俊二と幸子は見合いで出会い、双方が気に入って恋愛感情を伴いつつ結婚に至ったケースのようだが、喜世子にしてみれば、本人の意思で結婚した以上、どんな事情があろうと幸子には妻と母の役割をしっかりと果たす義務があるという思いが強い。幸子が歯科医という専門職であることや実家の歯科医院の跡継ぎでもあり、経営の要でもあるという背景など視野に入らない。嫁いだ後は全力で夫を支える世間一般の妻のように、幸子も身辺を整理して家庭に入るべきである、それが喜世子の言い分だろう。これには、先に触れた、主婦を女性の理想像とする時代の規範の影響もあろうが、確かに幸子の暮らしぶりには、一家を預かる主婦、そして修の母親としての責任感がほとんど感じられない。

幸子の実家への宿泊をめぐって、とき江と俊二が諍いをしたときに、幸子は「私としては、母も責められない気持ちなの、私間に立って辛いこともあるわ。困っちゃう」と語る。「けどもう、結婚した以上、姉さん、しっかりしなければいけないでしょう」と喜世子に諭されるまでもなく、幸子が今頃「困っちゃう」等と言いつつ出さずにはいられなく、幸子には、実家との関係にきちんと距離を置こうとする動きは見られない。それはとき江の意思でもあるようだ。

「俊二さんもね、よっぽど分かってもらわないと困る

んですよ。幸子の立場や私たちの気持ちもねえ。そりゃ今は、新憲法で跡取りなんて無くなったって言うけど、そんなものじゃありませんからね。私たちの心細い気持ちで、若いあなた方にはまだ分からないかもしれないけど、年寄りになれば分かるようなもんですよ。もともと幸子をあなたに差し上げるについちゃ、私たちは始めから賛成じゃなかったんですからね。」

(第5章)

「そんなものじゃ」ない、と言うとき江の言葉には、今も幸子を跡取りと考えている意図が見える。とき江には、当面は喜世子がいるから幸子が家事に専従できなくても大丈夫という見込みがあったのだろう。そうして、喜世子が結婚するなどの折を見て、俊二や修とともに、二世帯で暮らしたいという望みを提案しようと目論んでいた可能性が高い。この計画も、とき江一人のものではなく、幸子も含めた元井家のものだろう。

一方、俊二の方には幸子の両親と暮らす気持ちはない。俊二と幸子の次の会話には、このような二人のずれが如実に現れている。

「戸塚のお父さんねえ。」／と、喜世子の戻ってこないうちに、もう苺を食べはじめながら、また実家の話を切り出した。／「私たちを、戸塚のうちに一緒に住ませたい気持ちなのよ。」／「あの家、狭くて入る部屋なんかじゃないか。」／「そうよ。だけどねえ、やっぱり淋しいらしいのね。」／「そんなこと言ったら、しょうがないじゃないか。俺は、厭だよ。」

(第2章)

同居の話が結婚後の今持ち出されているところを見ると、娘と暮らしたいという幸子の両親の希望は、結婚前には俊二にはっきり伝えられていなかったようだ。そして、俊二に幸子の両親と同居する気持ちはないこともはっきりした。幸子はおっとりともろやかな性格の女性だが、一人娘で兄弟もなく育ったせいか、食事の支度をして待っていた喜世子への心配りもなければ、実母を亡くして日の浅いま新しい義母を迎えた修への愛情表現も乏しい。同居の話は実父の希望として伝えられているが、この機会に幸子が夫の意向を探っているようにも見える。

俊二にも迂闊な部分はあったと言えよう。恋愛感情が伴ってしまえば、幸子との結婚を諸条件のために破談にすることもできまいが、自身も歯科医である歯科医院の一人娘と結婚するのに、将来の生活設計についてしっかりした話し合いがなされていないのは、あまりにも無防

備であった。俊二は結婚後のいずれかのタイミングで、つまりは喜世子が結婚して修の面倒を見られなくなったから、幸子が勤めを辞めて家庭に収まると思っていた。次の引用は、幸子が実家のとき江から喜世子の縁談を持ち帰った場面からのものである。

「お姉ちゃん、お嫁にいったら、僕、誰といるの。僕、ひとりではいられないや。」／「バカ、そんな心配しなくて、修は大丈夫だよ。母さんがいるさ。」
 〳と、俊二は言い、幸子はどんな風に考えているだろうと胸の中で考えていた。幸子は戸塚の家へ移ることを予想していたけれど、今は黙っていた。

(第7章)

俊二も幸子も、喜世子の結婚する時が大きな転換点になることを知っていた。喜世子がいるために当座は共稼ぎ夫婦もうまく保たれたが、喜世子が家を出ていくことで初めて、修の面倒をだれが見るかという具体的な問題に直面し、親を支えるためという言い訳で続けてきた歯科医の仕事はどうするつもりなのか、幸子の意思が問われる時を迎えていた。そもそも、喜世子の縁談を用意したのはとき江であり、そのとき江は「喜世子の縁談がまとまれば、俊二たちに戸塚の家へ同居をさせたい計画さえ立ててい」て、幸子もそれを知っていた。

ところが、彼女たちの思惑を断ち切るように、俊二に転勤の話が持ち上がる。

3 俊二の転勤

喜世子が見合い相手の藤田克己とバレエを見に行くなど交際を進展させているさなか、俊二に突然名古屋への転勤の話が持ち上がった。

俊二は幸子と二人きりになると、この四、五日来、胸においてきたことを今日は言い出そうとおもった。俊二にしてみれば、この問題は自分の勤めと、家庭の事情のことだった。同時にそれは、幸子の愛情をもっと確かめたいということでもあった。(第10章)

「胸においてきたこと」すなわちこの転勤は、実は社命というほどのものではない。「俊二は、相談のつもりで幸子に話したはずだったが、幸子の動揺した顔色を見た瞬間から、彼の気持は却って転勤のほうに決まったようだ」とあるところからも、まだ打診があった程度で、拒む余地さえ

あったことが窺える。この転勤話を、結婚に対する幸子の思いのほどを測るチャンスにしようと思えば俊二は考えていたのだった。

予想通り困り果てる幸子をみた俊二は、ここを先途と幸子と実家の密着ぶりを責め立てる。会社員の夫に断る余地のない転勤の命が下れば、家族もそれに伴って移動するのがこの当時の一般的な考え方であった。いつまでも元井家の娘としての部分を捨てきれず、修の母にも俊二の妻にもなり切れない、あいまいな幸子を俊二は許せない。いらいらと思いをたぎらせていた俊二には、この転勤話は渡りに船であったと言える。

「何も言わぬ安之助の淋しさも、幸子は今からわが身に感じられるし、母のとき江が、この問題にどんな態度に出るだろう、とおもうと、幸子はあわてる気持だった」とあり、確かに老いた両親を思う幸子の心の痛みは同情に値する。しかしながら、サラリーマンの夫を持ちながら、転勤話が出てはじめて「あわてる」幸子は、やはり状況を楽観視し過ぎていた感がある。

不思議なのは、幸子の脳裏に、自身のキャリアが断られることへの不安がまったくよぎらないことだ。俊二について名古屋へ行けば、終戦前後の混乱の中、苦学して手に入れた歯科医としての道はあきらめざるを得まい。落胆した父は歯科医院を続けていけなくなるかもしれない、そうならば生涯を開業医として全うできるはずの幸子の人生設計にも狂いが生じよう。「戸塚のほうなんて、簡単じゃないか。お父さんではやってゆけないんなら、人を頼めばいいんだ」と俊二は言うが、それは安易で乱暴な判断であろう。しかしながら、そのような反発は幸子自身からは発せられない。

元井歯科医院に安之助夫妻のどのような思い入れがあるかは詳らかでないが、安之助は朝鮮で開業して戦時下を過ごしている。高齢の安之助が歯科医になったのは明治末期であろうか、その頃に歯科医師となった彼は、家業を継いだか、苦学して志したか、少なくとも彼なりの物語を負って今日に至っているはずである。幸子を当時珍しい女性歯科医にしたのにも、歯科医院を残したいという切なる願望が感じられる。が、幸子には跡継ぎとしての使命感も、自己実現の意欲も感じることができない。

俊二の転勤が、会社からの厳命であるならばまだしも、幸子を実家から切り離すための策であるとしたら、後味の悪い手段であると言わざるを得まい。しかしながら、いつまでも実家と婚家の間で足元の定まらない幸子に、明確な意思表示をさせるには、多少の荒療治は必要であろう。

このあと、俊二の転勤を知ったとき江によって、喜世子の縁談が破談にされる。おそらく幸子の名古屋行きを強硬

に反対するとき江が、幸子と俊二を離婚させようとする中で、修の子守り役がいないと離婚が難しくなると踏んだのであろう。結論が出ないまま、俊二は先行して名古屋での生活をはじめ、残された三人のうち、幸子はもう戻らないのではと思われるほど実家に行ったままになっていた。

喜世子は、自分の結婚が兄夫婦の関係や元井家の思惑の中で運ばれているのを感じ取り、勇気を出して藤田の意志を自ら確認し、今度こそ自分の幸せを掴める確信を手にした。

しかしながら、幸子を諦める覚悟が固まりつつある俊二は、またもや喜世子に「もう暫く、辛抱してもらいたい」ことを告げ、名古屋で再び、修との父子生活を支える役目を負わせようとする。「修が可哀想なんだよ」という理屈は、喜世子を泣かせるのに十分な残酷さを孕んでいよう。俊二は、自分たち夫婦の愛情確認のために買って出た転勤話で、妹の一生を犠牲にさせようとしていることになる。

俊二には、家制度の家長的な横暴さが色濃く残っている。妻は結婚したら夫との新しい家庭づくりに専念すべきであり、いつまでも実家との関係を濃厚に保つのは望ましくない、主婦業に専念し、夫や子供のために尽くすべきである、というのが俊二の考えである。それでいながら、結婚しようとする妹は自分たち「実家」に縛りつけて幸せを取り上げようとした。そんな俊二が、今回ばかりは妹の強い拒絶にあって、ようやく一つの気づきを手にする。

「家の問題というのは、家族制度は無くなったんだが、人間の感情の中に巣くったものはなかなか根づよいですね。第一、僕にしたって、何も家族制度で、喜世子を縛ったわけじゃないが、自分が困るとなれば、喜世子をやっばり縛りつけておこう、とおもいつくんですからね。今度、喜世子に拒絶されて、はっと気が付きましたよ。」(第16章)

「人間の感情の中に巣くったもの」が「根づよい」とは、「自分本位に考えると、自分の愛情につながるものの不幸を、知らず知らずのうちに傷つけている」[3]ということだろう。たとえば、俊二が幸子を妻として修の母として独占したいと思う気持ちは根強く、そのためには幸子と実家との縁も切りたいと思うし、それがだめなら喜世子の縁談さえ辞めさせたい。家制度とは呼ばなくなっても、家族を家族という形で保つことに執着すると、家族の誰かを縛りつけてしまう、ということに、喜世子の涙で俊二はようやく気付いたのだろう。が、その俊二が、幸子に対しては柔軟になれない。

4 幸子の覚醒

昭和20年代後半(1950~54)の常識に照らせば、俊二の幸子に対する不満は至極当然のものだろう。旧民法による家族制度の中で育ち、女性は嫁いだら実家との縁は切れ、夫や舅・姑に尽くすものと刷り込まれた世代に属する俊二に、幸子のようなケースは理解されづらい。新しい時代の核家族においても、現金収入を得てくる夫は一家の大黒柱であり、専業主婦の妻との間に実質的な対等関係はまだ築けていない。共稼ぎの幸子とて、働く必要がないのに仕事をさせてもらっている妻、という意識を待たせられている時代である。

しかしながら、夫の出張中を狙ったように実家に泊まり、修のことも家事の大半も喜世子に任せ、歯科医としての勤務に生活の大半を費やす幸子にも大いに問題はあつた。一人娘で可愛がられて育ったから気が回らないと自覚するように、幸子は喜世子や修の痛みを感じとれないわりには、安之助の淋しさは感じ取り、とき江の態度にも敏感に反応する。

ここで気になるのは、幸子という女性の意思や希望、欲求というものの見えにくさである。『子供の眼』で目につくのは、幸子の内面の描写の少なさだろう。彼女は両親のもとで大切に育てられ、歯科医という一生の職業を手にし、父の開業した歯科医院を継ぐという人生のルールまで用意されている。が、彼女自身にあるべきはずの、自分の職業への情熱や執着というものが、一切見当たらない。出張から帰った俊二が迎えに来ると、とき江を振り切ってまで一緒に帰るところを見ると、俊二への思いは確かなものと思われるが、義母としての修への配慮や、義姉としての喜世子への気遣いなどには目立って乏しいものがある。つまり、幸子には俊二とともに新しい家庭を作ろうという気概や意欲が見えないのである。

幸子にはっきりと確認できるのは、淋しがる親への同情や甘え、そして俊二との結婚生活は手放したくないという意志の二つである。そして、放っておいてもいつか俊二や修とともに親元に帰らねばならない日が来ると見込んでおり、自分が何らかの努力をしなくても、両親も俊二も手放さずに暮らせる日が来ると楽観している。もしそうなったら、幸子は歯科医として共稼ぎの生活をし、修はとき江の手を借りて育て、将来は元井歯科医院を継ぎ、安泰な人生を手にする事ができる。

佐多が突きたかったのは、この幸子の安易さではなかったか。幸子とて戦争を経験し、苦も無く今日まで生きてきたわけではない。しかしながら、両親の揃った開業歯科医院の一人娘として、やはり幸子には、与えられるままに生

きるという姿勢がしみついているように思われる。

法律が変わり、家制度がなくなろうとも、家庭を築いていくには、家族一人一人が互いの信頼を得られるだけの実績を積み重ねばならず、そのためには長い時間と数々の経験を必要とする。まして幸子は後妻となり、継母となって俊二・修親子と家族になるのだから、遅れてきた家族としてのハンディを乗り越えるにはより強い覚悟と意欲が求められよう。受け身に徹した幸子の人生設計に乗って、喜世子の結婚を機に早いうちから元井家での共稼ぎ生活をスタートさせていたら、この家族は、一つ家に住まうだけの同居人集団になってしまったのではないか。

いよいよ幸子に見切りをつけた俊二は、幸子に別れの手紙を出し、返事を待たずに修と二人、名古屋へ向かおうと決心した。そこへ、とき江を振り切って実家を出てきた幸子が駆けつける。

「ごめんなさい。ごめんなさいね。かんにんしてエ。」(中略)「お父さんから、あなたによくあやまっておいて、って言われて来ましたの。お母さんも今度は考えてくれると思いますの。私、名古屋へゆきます。」(中略)「私、あなたの手紙を見て、こわい気がしたの。これは、大変だ、とおもったの。」幸子は次第に、今まで気負ってむしろ弾んでいた気持が沈滞してゆき、泣き出した。「別れるなんて、よく言い出せたのね。私、おもいもしなかったわ。甘かったわ。」(第 16 章)

俊二の、喜世子に対するエゴイズムは妹を苦しめるだけのものではあったが、幸子に対するエゴイズムは、幸子の家庭人としての覚醒に効果を発揮した。俊二の振る舞いにも問題はあがるが、夫婦が協力して新しい家庭を作ろうとしているこの時に、いつまでもよそ見をしている幸子の態度にもまたエゴイズムがあったと言えよう。最終的には俊二の必死さが、幸子の目を覚まさせた。

佐多は、角川小説新書『子供の眼』(昭和 30(1955)年 8 月)の「あとがき」において、「生活はいろいろの条件を持っているが、人間は、その外側の条件にばかり従っていると、自らの幸せを流してしまうことにもなる、ということ」、「愛情がお互いの中で、生活の外側の条件のために失われてはならない、ということ」を強調している。

新しい家庭を築くのだという気持ちの切り替えを持たず、娘気分で結婚に臨んだ幸子を、俊二の揺さぶりが大きく変貌させた。自由に家庭を築いてよい新しい時代が到来したとはいえ、敗戦後の家族の支え合いの中で身動きが取れずに幸せをあきらめた人々は無数にいたに違いない。老親を抱えた幸子、兄と甥の暮らしを支えた喜世子、抜き差

しならない絆に縛られた二人の女性が、気がかりや後ろめたさ、同情や愛情に足を取られそうになりながらも見事に跳躍した姿こそが、多くの人の心をとらえ、この作品を映画化・ドラマ化・繰り返しの単行本化^{†6}につなげていったのだろう。

おわりに

結局、歯科医院の跡継ぎ問題とか、聡子の老親の寂寥感をどう埋めるのかとか、幸子の離職はどうなるのかとか、山積していたこれらの問題はすべて「外側の条件」に過ぎなかった。幸子の結婚生活をもっとも脅かしていたのは、本人が「甘かった」と語る、幸子の人任せの姿勢であった。幸子が数々の「外側の条件」を跳ね返せたのは、自分にとって一番大切なものが何であるかを見極められたからだろう。

発表された昭和 29 年は、作品内を見てもすでに国民生活は落ち着きを取り戻し、映画を見たり、デパートで買い物を楽しんだりといった人々の姿が確認できる。が、戦争で家族を壊された人々は、残された家族同士、ぎりぎりの支え合いで生きていたことだろう。それは美しいことでもあるし、果たさねばならない義務や責任でもあったに違いない。しかし、それによって若い世代が自身の幸せをあきらめているとしたら、それもまた戦争の二次被害を自家中毒的に引き起こしていくことになってしまう。

佐多はこの作品で、まずは自分の幸せを優先すべきことを強く呼びかけた。戦時下の執筆についてその責任を厳しく問われていた佐多だが、それを覆し、平和への祈念という新たな方向性を示したと言える作品だろう。

^{†6} 初出の週刊誌『家庭朝日』連載の後、翌昭和 30 年に角川小説新書『子供の眼』が刊行され、その後昭和 33(1958)年の『現代国民文学全集』(角川書店)・昭和 35(1960)年の『新選現代日本文学全集』(筑摩書房)・『壺井栄・佐多稲子集』(講談社)等に所収、昭和 31 年には^{†2}に示した通り松竹で映画化され、また[1]の矢澤論によれば昭和 38 年にテレビドラマ化もされているという。

参考文献

- [1]「佐多稲子『子供の目』の世界」矢澤美佐紀：『新日本文学』第 57 巻第 2 号(平成 14(2002)年 3 月), pp. 117-121.
[2]「時と人と私のこと(7)―テーマとの関係」佐多稲子：『佐多稲子全集』第 7 巻(講談社、昭和 53(1978)年 6 月), p 417.

[3] 「新しい家庭」佐多稲子：『現代女性講座 I 幸福な生き方』（昭和 30(1955)年 9 月, pp148-157.

※『子供の眼』よりの引用は『佐多稲子全集』第 7 卷(講談社、昭和 53(1978)年 6 月)によった。